

---

B.C.B

真織

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B・C・B

### 【Nコード】

N1141A

### 【作者名】

真織

### 【あらすじ】

舞台は百年にも及ぶ戦争が伝説の勇者と呼ばれる二人の少年によって終戦し、九年が経った世界。イシュタル村に住む勇者に憧れる少年ルイスは幼なじみのリアや友人、教師のアーヴィン、両親と共に平和に暮らしていた。そんなある日、村が謎の集団に襲われる。それと同時に何故かリアとアーヴィンが旅に出ると言いだし、ルイスはその旅に同行することにする。

## プロローグ

昔久、美しい女王が治めるイシュタル王国という大きな国がありました。

その国は四方を大きな森が囲んでいましたが、作物にとっても恵まれているため、この国に住む多くの人々は生活に困ることはありませんでした。

賢く、優しい女王のもと王国はとても平和でした。

そんなある日、女王は流行り病により亡くなりました。人々はとても悲しみました。

しかし、女王の夫であるハロルド王は悲しむことなく、女王に代わって国を治めました。

そして、すぐさま王は他国を侵略するべく挙兵し、百年に及ぶ戦争が始まりました。

世界暦1812年。

戦争が開戦されてから百年が経ちました。

ハロルド王は死にイシュタル王国は滅びました。

しかし、戦争は王の意志を継いだ者たちによって激化しました。

そして、王の意志を継いだ者たちによって巨大な兵器が造られました。

その兵器は一瞬にして多くの国々を消し去る力がありました。

人々はその兵器の存在に恐怖しました。

ですが、その恐怖は二人の少年により除かれました。

二人の少年が兵器を破壊したのです。

そして、その二人の少年は後に伝説の勇者と呼ばれるようになり  
ました・・・

## #2

世界暦1821年。

戦争が終結してから九年が経過した世界は少しずつ平和を取り戻していた。

世界地図で見ると大陸のほぼ中央に位置する小さな村、イシュタル村。

四方を巨大な森に囲まれ、人口が少ないがとても平和な村である。太陽が真上に昇った頃、村で唯一の学校では昼休みを迎えていた。「やっぱ、伝説の勇者ってカッコイイよなあ。オレもいつか勇者になって世界を救いてえ！」

カーキー色のツンツン髪に蒼い瞳を輝かせた少年、ルイス・トンプソンは狭い教室内にある四席の机の内、二席をくっつけ、その上に乗って言った。

「ルイス、冗談はあんたの顔だけにしときなさいよ」  
すると深い溜め息と共にキツイ一言がルイスに浴びせられた。

ルイスが斜め向かいの席に座って昼食をとっているツインターの少女、イヴリン・ゴートを睨み付ける。

「何だよ、イヴ。オレが勇者になれないってのかよ？」

「そういうこと」

「何ではつきり言い切れるんだよ・・・」

「あんた本当にわかんないの？」

イヴリンが更に深い溜め息を吐きながら隣の席に座っているプラチナブロンドに蒼い瞳の少女、リア・クリストファーを見た。

おとぎ話に出てくるお姫さまのように整った顔立ちのリアの表情は何故か曇っていた。

ルイスはわけがわからないと言った具合でリアとイヴリンの顔を交互に見ていた。

しばらくの沈黙が流れ、最初に口を開いたのは三人の内の誰でも

なく、性別と髪型と性格以外すべてがイヴリンと同じ少年、イヴァン・ゴートだった。

「ようするに戦争が終結した今では救うものが何もない。だから、ルイスが勇者になるけとはありえないって、姉さんは言いたいんだよ」

「……」

ルイスは今まで教室の片隅で静かに昼食をとっていたイヴァンの発言にムツとした表情を浮かべたまま黙り込んでしまった。

「イヴァン、そんなにはつきり言わなくても……」

「リア、こういうのははつきり言った方が本人のためになるのよ！さすが双子の弟、私の言いたいことわかってる」

姉に誉められ、イヴァンが少し顔を赤らめる。

「んなのやってみないとわかんねえだろ！」

「あんたはそんなに戦争がおきてほしいの？」

「んなこと言ってねえだろ」

「言ってる」

「言ってねえ！」

二人は今にも掴み合いのケンカをしそうな勢いで言い合いを始めた。

「二人ともケンカは止めてください。もうすぐ午後の授業が始まりますから！」

リアが二人に必死に言い掛けるが、ケンカは止まる気配を見せない。

一方、イヴァンは関わらないように教室の隅に座っていた。

そして、ちょうどその時、教室のドアが開いた。

「さ、午後の授業始めるぞ！ん、どうした？」

現われたのは数カ月前に赴任してきた若い教師のアーヴィン・リッジリーだった。

「アーヴィン先生、この二人のケンカを止めてください！」

リアが必死に訴えかけるとアーヴィンは髪を一掻きし、ルイス

とイヴリンのもとへ歩いて行く。

「ケンカはいけないなあ。この村には君たち四人しか子供がいらないだから、仲良くさいとな」

「先生、別にケンカなんかしてない。十五歳にもなって夢みたいなことばかり言うルイスに現実を教えただけ！」

「勝手なことばっか言うなよな」

アーヴィンが優しい口調でルイスに聞いた。

「ルイス、また勇者の話かい？」

ルイスは何も答えない。

「いいかい、九年前の戦争ではたくさんの人たちが亡くなったんだ。今でこそ平和なこの村も多くの被害を受けている。誰ももう一度戦争が起きてほしいと思っている人はいない。勇者に憧れる気持ちはわかるけど、君の夢はかなわないことなんだよ」

どこか寂しげな表情を浮かべながらアーヴィンが言う。

「・・・」

リアは何も言わずにルイスを見る。

「なんだよ、どいつもこいつもオレの夢を否定して！オレだって戦争起きて欲しいなんて思ってた・・・」

ルイスの言葉は途中で止まった。

なぜなら、脳裏にオレンジ色の炎に包まれたイシュタル村の映像が浮かんだからである。

「どうしたんですか、ルイス？」

リアがそう言った時だった。

雷のような轟音と地震のような揺れが襲った。

数秒後、音と震動が止み、ルイスは真っ先に教室の窓から外を見た。

「何だよ、これは・・・」

ルイスの目に映ったのは、オレンジ色の炎に包まれたイシュタル村だった・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1141a/>

---

B.C.B

2010年10月14日01時25分発行